
創られたもの

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
創られたもの

【Nコード】
N8943P

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
童話作家の夫婦がキャラクターとして幽霊を描いた。その幽霊は忽ち大人気となった。すると彼等が実際に出て来て。ほのぼのとしたファンタジーです。これもまた家族の形です。

第一章

創られたもの

今彼はだ。妻と話していた。

「なあ」

「どうしたの？急に」

「次の新作な」

「決まったの」

「ああ、決まった」

こう妻に返す。彼は童話作家である。文章は彼が書いてだ。そして妻がイラストを描く。夫婦二人三脚で仕事をしてきているのだ。その夫がだ。こう妻に言ったのである。

「今度は幽霊だ」

「あら、童話に？」

「そう、幽霊なんだ」

また妻に話した。

「コミカルで楽しいな。そんな幽霊なんだ」

「じゃあ日本のうらめしや〜じゃなくて」

「もつと他の。外見はな」

「どんな感じ？」

イラストを担当する妻にとっては絶対に確認しておきたいことだった。だからだった。その外見についてはすぐに問い返したのであった。

「それで」

「まずはな。白くてな」

「ええ、色は白ね」

「で、頭に三角のあれがあつてな」

「幽霊のそれね」

「そう、それでな」

夫はさらに話していく。

「足はないんだ」

「幽霊そのままね」

「で、手だけがあって」

夫はここで両手をだらんとしてみせる。そのうえで曲げている。

その姿勢こそは。

「こんな感じだな」

「あら、幽霊そのままじゃない」

「手はこうしてな」

「わかったわ。手足はそんなのね」

「それで目は丸くしよう」

目についても話す。

「顔は扁平な感じだな」

「そうするのね」

「口は一文字でべろんと舌を出してる」

口と舌まで話す。

「全体的に太くて短くてずんぐりとしていてな」

「ふん、それで？」

「首はない。髪の毛もない」

そこまで話す。

「そんな外見だな」

「で、性格はコミカルね」

「そつちは俺が書くから」

文章担当の彼のものだというのだった。

「それでやるから」

「外見はわかったわ。じゃあね」

「それで行くか」

「了解、じゃあ文章御願いな」

「イラスト頼むな」

夫婦でこう話してから作業に入った。そのうえでできた作品は。

「ああ、イメージ通りだ」

「ええ、こつちもよ」

夫は妻のイラストを、妻は夫の文章を見てだ。互いに笑顔になつて話す。

「その感じだったらな」

「いけるわよね」

「ヒットするかどうかはわからないけれどな」

「それでもね。いい仕事できたわよね」

「ああ、確かにな」

こつ話してだった。二人はその仕事を世に送り出したのであった。その反響は。

そのユーモラスで可愛らしい外見とコミカルなキャラクターでだ。二人が創った幽霊は人気キャラとなった。所謂ハローキティやのんとんと同じようにだ。子供達だけでなく大人からも愛される。そんなキャラクターになったのだった。

ぬいぐるみもできればグッズもできた。そのうえで皆から愛される。夫婦には版權からかなりの収入が入った。だが彼等は収入はどつでもよかった。

自分達が創り出したそのキャラクターがだ。人気者になり愛されていることがだ。彼等にとっては非常に幸せなことだったのである。そのことに喜んでだ。彼等は話すのだった。周りには幽霊のぬいぐるみにキーホルダー、それにコップと。様々なグッズがあった。

第二章

そのグッズを一つ一ついとおしげに見ながら話すのであった。その内容は。

「この子、人気者になれてよかったわね」

「全くだな。今は一人じゃないしな」

「そうね。お兄さんもお姉さんもできてね」

「両親もできたし友達もできた」

こうしたキャラクターの常で愛されるとどんどんそうした相手も出て来る。この幽霊にしてもだ。このことは同じであったのである。

「いいことだよな」

「本当にね。お金よりもね」

「そっちの方がずつとな」

いいという二人だった。

そして周りを見てだ。自分が創り出したそのキャラに言うのだった。

「じゃあな。これからもな」

「愛されてね、皆に」

こうしてその幽霊と他の面々に愛情を注ぐのだった。しかしだった。

暫くしてだ。こんな話が巷で囁かれるようになった。

「あれっ、遊園地で？」

「着ぐるみじゃなくて？」

「本物？」

「本物が出たの？」

幽霊達についてこんな話がされるようになっていた。

「まさか。そんなことが」

「ある訳ないよ」

「だって。幽霊は幽霊だけだよ」

皆それでもだと話す。

「あれってキャラクターだし」

「そんなの出る筈がね」

「そうそう、ないって」

「絶対にね」

しかしだった。幽霊達が実際にいるという都市伝説が出てしまった。これが本当のことなのかはたまた見間違いやそうした類なのかはわからない。しかしであった。

このことは夫婦の耳にも当然入った。それでいぶかしみながら言うのであった。

「何か変なことになったよな」

「そうね」

妻は夫の言葉に首を捻りながら返した。

「あの子が実際にいるなんて」

「それは幾ら何でもね」

「ないわよ」

妻は笑ってその可能性を否定した。

「絶対にね」

「何か家族もいるけれどね」

「それでもね。そんなことはね」

「有り得ないさ。確かにあの子達は僕達の子供さ」

自分達が創り出したという意味での言葉である。

「けれどそれでも」

「現実世界のことじゃないから」

「どうしてそんな話が出たんだらうね」

「都市伝説ってわからないものよ」

「ここでこう言う妻だった。」

「それってね」

「わからないものなんだ」

「そうよ、こういうものはね」

そうだとするのである。

「ほら、人面犬とかああいうのも」

「実際に見た人はいないしね」

「それに。この子達」

相変わらず周りに溢れている幽霊達のグッズを見る。どれも「ミカルで愛らしい表情のままだ。二人を囲んでいるのであった。

「そこでも悪いことしていないし」

「ただ出ているだけだしね」

「だから。気にすることはね」

「ないっていうんだね」

「ええ、そう思うわ」

こう話をしていたある日のことだった。そしてである。

次の日の朝仕事に向かおうとした。それで家の中の仕事場に入った。

しかし部屋に入るとだ。彼がいたのだった。

「あっ、しまった」

「しまったって」

「えっ、今のって」

「あなたが言った？」

「君が言った？」

お互いに言い合う。

「まさかと思うけれど」

「違うの？」

この言い合いでだ。お互いわかってしまった。

第三章

「違うわね」

「そうだよね」

「じゃあ今言ったのは」

「誰なんだろう」

「ううん、まずいなあ」

ここでまた声がした。

「まさかパパとママが出て来るなんてね」

「パパにママ？」

「僕達のことかな」

ここでまた首を傾げさせる夫婦だった。

「ひよつとして」

「これって」

「けれど子供達は」

「まだ寝てるし」

二人にも子供達がいる。男女の双子の兄妹である。

しかしその子供達はというのである。

「赤ちゃんだし」

「とても言葉なんて」

出すような歳ではなかった。産まれてまだ一年である。赤ん坊そのものである。それ以外の何でもない。ましてや今の言葉なぞともであった。

二人はこのことも思い出してだ。そうしてだった。

「あれっ、じゃあやっぱり」

「今の言葉は子供達じゃない」

これは言うまでもなかった。少しだけ考えればだ。

しかしだ。それでもだった。

それが誰かだ。それが大きな問題だった。

「ええと、じゃあ今の言葉は」
「誰なのかな」

「パパとママって呼んだけれど」
「それも僕達も」

「うづん、どう言えばいいのかな」
「そっだよね」

今度の言葉は一つではなかった。複数だった。

「まさかここで会うなんてね」

「思いも寄らなかつたし」

「どうかかな」

「これって」

「今度は言葉が幾つも聞こえてきたけれど」

妻はまたしても首を傾げさせた。

「何なのかしら」

「とりあえずだけれど」

夫はだ。現実を話に出してきた。

「灯りを点けようか」

「そっね。それじゃあ」

馬も夫の言葉に頷いてだ。灯りを点けた。するとだ。

そこにいたのはだ。幽霊達だった。あの二人が共同で創り出して
童話に出しているあの幽霊達だ。部屋の真ん中に揃っていた。

そしてそのうえでだ。夫婦に対して言うのであった。

「ええと、僕達ね」

「こうしてね。出て来たんだ、こっちの世界に」

「そっだったんだよ」

「嘘だろ、それって」

夫がまずそれを否定した。

「何でそっなるんだよ」

「そっよ。貴方達があくまで童話の登場人物なのに」

妻も眉を顰めさせて話す。

「それで何で出て来たのよ」
「だから。僕達はパパとママに創り出されてね」
最初に創り出されたその幽霊が話す。
「意志を持ったんだよ」
「意志？」
「意志って」
「そう、意志を持ってね」
そう言ったと。二人に話すのである。
「それでこつちの世界にもね」
「出て来れるようになったの？」
妻のいぶかしむ言葉であった。彼等に言わせればママのだ。
「つまりは」
「そうなんだ」
「パパとママの前だけだけれど」
「創り出した人達の前だね」
出て来れるようになったというのである。

第四章

「そうになったんだよ」

「わかってくれたかな」

「いや、わかれて言う方が無理じゃないか？」

夫の言葉である。

「それは」

「けれどね。実際にパパとママの目の前にいるし」

「それが事実じゃない」

幽霊達は二人にこう返した。

「ねえ。だから」

「それは受け入れないと」

「理屈がわからないわよ」

妻は彼等に対して理屈を出した。

「意志を持ってこうして出て来るなんて」

「だって創ってもらったから」

「愛情を注いでもらってるしね」

「そうそう」

ここで、だった。愛情という言葉が出て来たのであった。そしてこのワードが話に出るとだった。話の流れが変わるのであった。

幽霊達はだ。その愛情を交えて話すのだった。

「創ってもらえた時からそうで」

「それで一人一人創ってもらって」

「愛情を注いでもらったからね」

「だから意志を持てたんだよ」

そうだったというのである。

「それで。僕達もパパとママが大好きだし」

「二人のことを大事に思ってるから」

「つまり僕達もパパやママに愛情を持ってるってことだね」

「そつだよね」

こつした話を交えて。そしてだつた。

「愛情を持つてくれている人の前に出るものだしね」

「やっぱりね」

「うづん、そうなのかな」

「言われてみれば」

ここで二人も何とか頷くものを見つけた。

「それで？」

「それで私達も貴方達が見えるのかしら」

「他の人はどうかわからないけれどね」

「多分そつだと思つよ」

また答える彼等だつた。

「だからさ、パパ、ママ」

「いいかな」

笑顔で二人に対して言つてきた。

「これからもね」

「宜しくね」

「うづん、こんなことがあるなんて」

「まさかね」

二人はまだ首を傾げさせていた。

そのうえでだ。二人で話すのであつた。

「けれど実際にいるしね」

「夢じゃないわよね」

妻はここで言つた。

「やっぱり」

「ちよつとつねつてみて」

夫は自分の頬を差し出してきた。右の頬をである。

「夢かどうかね」

「ええ、じゃあ私も」

「君も？」

「つねってみて」

妻はだ。左の頬だった。

それを差し出してだ。夫に言ったのだ。

「御願いなね」

「ええ、じゃあ」

こうしてお互いにつねり合うとだった。痛かった。

その痛さを感じ合ってた。二人は言い合った。

「夢じゃない」

「そうよね、夢じゃないわよね」

「うん、間違いないね」

「じゃあ」

そのことを確認し合ってた。あらためて幽霊達を見てだった。

「夢じゃないことはわかったから」

「これは現実なのね」

「だからさつきから言ってる通りね」

「そうなんだよ」

「僕達は実際にいるから」

「ここにね」

そつだというのであった。彼等はだ。

第五章

そしてだった。二人の周りを囲んでだ。

「じゃあパパ、ママ」

「これからね」

「楽しくやろうね」

「それじゃあね」

囲まれた二人はだ。ようやくであった。

「ではそれじゃあ」

「宜しくね」

やっと笑顔で言葉を出せた。そしてそれからだった。

「じゃあさ、ここはさ」

「僕がこうなつて」

「私がそこをこうして」

「そうするんだね」

「うん、そうだよ」

文章を書いている夫が自分の机の周りをふわふわと飛ぶ幽霊達に話していた。

「君達はそうさせてもらうから」

「わかったわ、それじゃあね」

「楽しくやらせてもらうわ」

「今度もね」

彼等はそうだった。そしてである。

次はだ。妻だった。

妻も自分の席で周りをふわふわと飛ぶ幽霊達の言葉を受けてだ。

そうしてやり取りをしていた。

「あつ、いい感じね」

「僕可愛く描いてくれてるね」

「私も。何か物凄く美人ね」

「有り難う」

「ママ、綺麗にしてくれてるね」

「だって貴方達だから」

「だからだと言う妻だった。」

「子供達だからね」

「そう、僕達はパパとママに創ってもらったからね」

「子供達になるよね」

「だからね、パパ、ママ」

満面の笑顔で二人に言う。

「これからもね」

「宜しくね」

「うん、こちらこそね」

「宜しくね」

今は笑顔を交えさせる彼等だった。二人にとって幽霊達はだ。今ではもう子供達だった。紛れなく子供達であった。彼等が創った。

創られたもの 完

2010・9・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943p/>

創られたもの

2011年1月2日21時40分発行